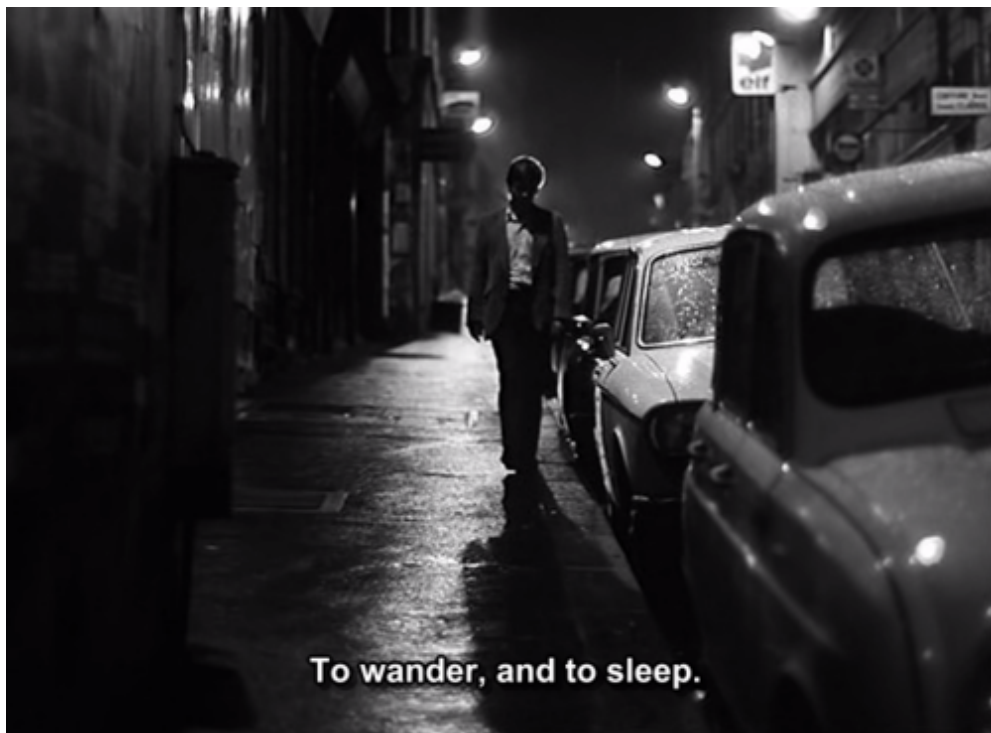


条件付きの翻訳

第4回 翻訳ワークショップ・シンポジウム

2015年7月25日(土)

北海道大学 人文・社会科学総合教育研究棟 W309 教室



第一部 13:00 講演

司会 竹内修一

塩塚秀一郎

「制約下の翻訳は何に対して〈忠実〉であるべきか
——ペレック『煙滅』の翻訳を題材に考える」

コメンテーター 藤田健

第二部 14:45 シンポジウム

司会 清水誠

竹内修一

「小説テキストの時制システムを如何に翻訳するか」
一橋瑞葉

「異文化要素の字幕翻訳ストラテジー」

佐藤知己

「アイヌ語・日本語間翻訳の諸問題」

コメンテーター 塩塚秀一郎

主催：翻訳ワークショップ・シンポジウム企画委員会

後援：北海道大学大学院文学研究科

連絡先：竹内修一（西洋文学講座）

bambou@let.hokudai.ac.jp

条件付きの翻訳

第4回 翻訳ワークショップ・シンポジウム 講演および発表の要旨

塩塚秀一郎（京都大学人間・環境学研究科）

「制約下の翻訳は何に対して〈忠実〉であるべきか——ペレック『煙滅』の翻訳を題材に考える」

いわゆる直訳であれ意訳であれ、あらゆる翻訳は〈何か〉に対して忠実であろうとしていることに違いはない。それでは、原典が制約のもとで製作されたテキストの場合、その〈何か〉とはいかなるものだろうか。原文そのものの形、意味、あるいは制約そのものの、あるいは制約の機能……。さまざまな要素への忠実性を想定できよう。ペレック『煙滅』の翻訳を題材に、制約下の翻訳において、原典に忠実であるとは何を意味するのか考えてみたい。

竹内修一（北海道大学文学研究科）

「小説テキストの時制システムを如何に翻訳するか」

フランス語で書かれた小説では、通常複数の過去時制が交互にあらわれながら物語がすすんでゆく。そのような小説のテンポラリティーを、フランス語より貧弱な過去表現に条件付けられた英語および日本語が、どのように翻訳するのか、あるいは翻訳できるのか、といった問題をマルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』の翻訳を通して考察する。

一橋瑞葉（北海道大学文学研究科大学院生）

「異文化要素の字幕翻訳ストラテジー」

あらゆる形態の翻訳において難題となるのが、ある特定の文化に固有の事物を指す異文化要素（Culture-Specific Items）の訳出である。異文化要素は目標言語内には存在しない、または違う価値観を持っているために直訳が不可能で、訳出の際にはなんらかのストラテジーを用いなければならない。本発表では、「字数の制限」という他の翻訳形態にはあまり見られない特徴を持つ字幕翻訳について、映画『JUNO』を分析に用いながら異文化要素そのものの時代性、またその翻訳ストラテジーについて考えてみたい。

佐藤知己（北海道大学文学研究科）

「アイヌ語・日本語間翻訳の諸問題」

札幌はアイヌ語に由来する地名だが、表記には「幌」という普段は減多に使われない漢字が用いられている。どうしてそんなことになったのだろうか。「ソメイヨシノ」をアイヌ語でどう言えばいいのだろうか。『アイヌ神謡集』（岩波文庫）の日本語は芥川龍之介が激賞したとも言われる名文だが原文のニュアンスはどのようなのだろうか。アイヌ語と日本語との翻訳に関わるあれこれを紹介し問題を提起する。